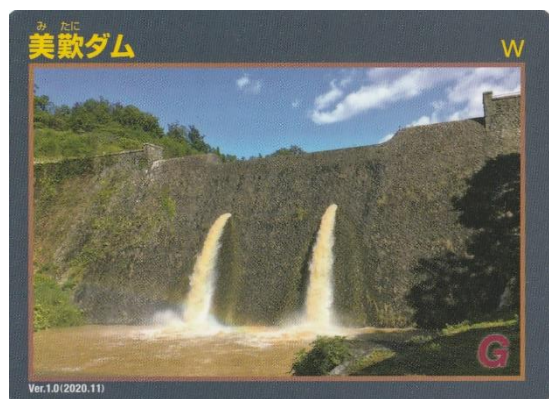


水道ジャーナリスト・有村源介の  
源流 本流 汽水域  
NO.35 コロナ 鳥取旅日記



雪に埋もれ静まり返った鳥取水道・美歎水源地



美歎ダム（ダムカード）

2020年1月から2年弱の間、世界は新型コロナウイルス感染症の影響を受け続け、今なお渦中にある。禍中というべきか。日本でも感染拡大が始まった2020年当初は、不安だけが覆っており、感染初期段階に罹患した人への偏見、差別、バッシングは凄まじかった。PCR検査が話題になり始め、検査を経験した者はちょっとした話題の主で、得意気だった。

「検査してきた」

「へえー、どこで?いくら取られた?」

と格好の話題になった。ようやくワクチン接種が始まると、1回目はいついつやった、2回目はされましたか、とワクチン接種が時代の挨拶代わりになった。2回目の接種率が上がるにつれ、それもなくなり、2021年秋の話題はもっぱら、「コロナはどうなった?」である。新規感染者は突然減少し始め、緊急事態宣言も解除された。

11月21日時点で明らかになった新規感染者は全国143人で、新規感染者ゼロが29県ある。1日の感染者が5000人を超えた東京都ですら、20人に止まっている。この理由として様々な見方がある。

「ワクチン効果と基本的な対策」(東邦大教授 舘田一博)、「変異重ねて自滅」(阪大特任教授 松浦善治)、「変異が追加され感染性喪失」(東大名誉教授 黒木登志夫)、「行動制限効果は不明」(東大准教授 仲田泰祐)と、感染症や統計の専門家も不明としている。(11月8日、朝日新聞)

感染者が急速に減少したことで、観光地の客は急速に回復基調にあるという報道があり、にもかかわらずGoToキャンペーンを再開する、という動きがあり、一方で、前回残ったチケットは販売するなという“お達し”もあり、相変わらずの迷走ぶりである。日本政府は観光・遊び代をどうしても将来世代につけ回したいらしい。感染者の減少で再び「ファクターX」が話題になり始めたとたんオミクロン株が登場し、市中感染も登場して、年末からは不安に

覆われつつも日常を取り戻したり自粛したり、めでたくもない新年を迎えることになった。

私の出張回数は2019年の1年間で25地域41泊66日だったと紹介したことがあった。旅行業の現場の人には及びつかないだろうが、回数は相当のもので、生来の旅行好きと、全国に必ず存在している水インフラ事業・人を対象にした業界記者と言う生業が為した結果である。感染が拡大した2020年12月からこの1年間の出張を挙げると、鳥取2泊3日、福岡2泊3日、大阪日帰り、今治～高松～松山2泊3日、松山～福岡3泊4日、大阪～草津1泊2日、2度目の福岡2泊3日、札幌1泊2日——合計13泊21日だった。自粛要請を無視した1年だったが、月刊誌に連載を抱えている以上、休載するわけにはいかない。

「そのうち、コロナというロシアン・ルーレットにぶち当たる」と言われることもあったが、出張中に人々と接触する中で危険を感じる事はそれほどなかった。紹介された初対面の人と、数時間を高松市内の飲み屋とバーで過ごした時は多少の不安はあったが、恐らく相手も同じ気持ちで、互いに微妙に距離を取り合った。

コロナ禍での旅はそれぞれに印象深いのが、記憶に残るのは2020年暮れの鳥取であった。鳥取大学で細井由彦副学長に何年ぶりかでお会いでき、増田貴則准教授にインタビューし、耐震検討委員会を取材する、と言う充実したものだったが、何よりも印象深かったことは、鳥取市水道局「旧・美歎（みたに）水源地水道施設」を訪問したことだった。

同行の人が運転しながらマメに調べてくれ、「なんか、水道文化財がありますよ」と美歎水源地に導いてくれた。数日前に降雪があり、市街地の雪はほとんど解けていたが、郊外にある美歎水源地はひっそりと雪に埋もれていた。その位置は高台というには山中の雰囲気があり、山中というには街に近く、なるほど、鳥取創設水道の水源地（美歎ダム）と一体として建設された浄水場は、こういう場所であったか、と納得するものであった。

そして、恐らく足を踏み入れることが叶わない静まりかえった無人の歴史遺産を、せめて柵越に見ようと正面の橋に向かうと小屋があり、なんと管理人が出てきたではないか。驚いた当方よりも、物好きな訪問者に管理人の方が驚いている様子だった。そして、場内に整備された展示室を見学出来たのである。

近代水道黎明期に詳しい人や、水道記念館巡りをされている方にとって、美歎水源地は十分、著名な施設であろうが、「今現在の課題」を取材の眼目に置いて走りまわって来た当方は、歴史遺産についての知識は乏しく、久しぶりの見学であった。そして、この施設をしっかりと維持管理している鳥取市水道局の姿勢に感服した。

もう一つ、鳥取水道の創設と言えば、三田善太郎に触れない訳にはいかない。美歎水源地も三田善太郎も、今日においてはWEBに情報がかなりあり、詳細はそれを検索頂くとして、興味深い（要は、面白い）ことは、H.S.パーマー直系の弟子にして我が国近代水道技術者第一号であり、陶管下水道の改良者である技術者の、その経歴が明らかでないことであろう。

パーマー没の後、横浜市で港湾、水道、建築を掛け持ちして携わっており、1909年（明治40年）、51歳で横浜市を退職した後、新潟市水道工事長、鳥取市水道工事技師長、下関市水道第一次拡張工事嘱託と、転々とした後、「東京製氷」なる会社を設立したと伝えられ

ているが、詳細は不明とされている。東京大学理学部土木工学科を卒業し、パーマー直系の弟子で輝かしい近代水道第1号たる横浜水道の第1回拡張事業を担ったという経歴に比して、晩年は恵まれなかったのか、本人は愉快に過ごしたのか。

1929年（昭和4年）、東京で死去、という記録は確からしい。73歳という生涯は、当時としては長寿だったというべきだろう。製氷会社で結構、楽しんでいたのだらうと思いたい。